

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ②

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

ねじれた思い

今回は、もう少しわたし自身のことについて書こうと思います。とは言え、実はライフストーリーについては『現代性教育研究ジャーナル』のNo.1からNo.36まで『『ありのままのわたしを生きる』ために』というタイトルで連載をさせていただき、それを加筆修正したものを「性教育ハンドブック vol.6」で一冊の冊子にまとめさせていただきました。詳しくはそちらをお読みいただければと思います。今号では、あの時あまり書かなかったことについて、少し述べることにします。

わたしは1960年代前半に生まれました。出生時に割り当てられた性別は「男」でした。ただ、小さい頃から女性のかっこうをしたい、あるいは女性の身体を獲得したいという思いがありました。一方、性的指向は女性に向いているため、「女性が好きな自分は男性だ」とも思っていました。男性であるにもかかわらず、女装をしたかったり女性の身体を獲得したいという自分をあらわす言葉を、当時のわたしは知りませんでした。唯一あったのは、「変態」という言葉でした。そんな自分のことは、世界の誰にも言うまいと決めていました。ただ、「言わない」ことを実践するのは、そうむずかしいことではありませんでした。なぜなら「変態」としての自分の側面を忘れてしまえばいいからです。忘れてしまうと、そこにはあたりまえの日常がありました。このようにして、自分の思いを誰にも言わず、小学校・中学校・高校・大学時代を過ごしました。

やがて教員になり、本格的に人権教育にとりくむようになりました。ヤンチャな生徒とかかわる毎日はとてもスリリングでした。また、部落の生徒や在日コリアンの生徒とのかかわりは新たな発見に満ちていました。そんな中で、わたしは自分の「変態」の側面を忘れて日常生活を送っていました。

ただ、ふとした瞬間に、その「変態」の側面を思い出すことができました。それは例えば、フェミニズムに触れた時でした。人権教育に携わっている限り、もちろんこの社会が女性に対していかに抑圧的であるかということは承知していました。そして、自分自身

が「男」である限り「抑圧する側」であることもわかっていました。しかし一方で「あなた方は、わたしがなによりもほしい『女性の身体』を持っているではないか」という、あこがれを通り越した、なかば憎悪ともいべき気持ちが自分の中にありました。あるいは、部落の人や在日コリアンの講演を聞いた時でした。「好きで部落に生まれたわけではない」「好きで朝鮮人に生まれたわけではない」といったフレーズを聞いた瞬間「自分も好きで男に生まれたわけじゃない」と思いました。やがてわたしは、そのような講演を聞いた時、どこかで自分の「しんどさ」と比較してしまうようになりました。とは言え、もちろんわたしは差別を受けていたわけではありません。差別を受けていないわたしは、「しんどさ」は抱えているものの「被差別当事者」なわけではありません。すると、頭ではその人の痛みに関心し差別の現実への怒りを持ちながらも、「あなたの話は人権課題。自分も学校でとりくみをしている。それに対してわたしのことは『変態』の話。人権でもなんでもない。あなたは確かにしんどいかもしれない。でも、わたしの話はしんどいだけじゃなくて、恥ずかしい話。あなたの方がマシでしょう」と、心のどこかで考えるようになっていきました。しかしながら、そういう自分の気持ちを表に出すことはできませんでした。なぜなら「なぜそう思うの?」という問いへの答は「変態だから」しかなかったからです。このような「ねじれた思い」を持つわたしは、頭では「人の痛みに関心しなければならぬ」と考え、そのように振る舞いながらも、心の奥底では人の痛みに関心できない、冷たい人間になっていったように思います。

しかし、当時のわたしはこうした自分の冷たさに気づいていませんでした。なぜなら、日常生活の中では忘れていたからです。それどころか、部落出身や在日コリアンの生徒が、教室の中でクラスメイトに向かって自らのことを語る場面に立ち会えたのはこの頃でした。次号では、そんなわたしにやってきた転機とそれ以降について書こうと思います。